フランス語の文構造と副詞

丹　羽　一　弥

はじめに

言語の語順が自由であるということは，文の構成要素をどのように配列してもよいということではない。そこには習慣的な型があって，文体によってそれより多少はずれても意味が通じるということであり，個々の要素の位置が文法的な働きを持っていないということである。この意味で古代フランス語の語順は現代フランス語と比べれば自由であった。従って現われる文の型も多様であった。ところが現代フランス語においてはその多様性は失なわれ，ほとんどの文が（主語—動詞—）の順で現われている。このようになった原因については様々な説明がなされているが，ここではこの文型の増加する原因ではなく，その過程について考えたい。

古代フランス語の語順

古代フランス語は現代フランス語とは別の文法体系 — 今ここで関係のあるものとしては動詞の人称語尾，冠詞や名詞の格など — を持っていたので，主語は文の構成要素として文中に現われない場合があるし，文中で主語や目的補語などの名詞がどの位置を占めるか文法的に定まっているわけではない。しかしながら語順が全く無秩序であるというわけではなく，語順というよりむしろ文構造の枠組として平均的な型を得ることができる。

古代フランス語の散文の語順について既に述べられていることをまとめると次のようになる。[1)]

1) 文の構成要素は動詞，主語，目的補語，属詞，副詞である。
2) 文は図(1)のように導入枠，動詞枠，第三枠の3つの枠よりなる。

図(1)　［　文　］ ＝ ［導入枠］—［動詞枠］—［第三枠］

3) 導入枠は文の最初に現われる枠であり，そこには定形動詞以外の構成要素が1個だけ入る。
4) 動詞枠は文の2番目に現われる枠であり，定形動詞とそれに付随する付属語（現代語のne，y，en，seや補語代名詞me，te，le，etc.にあたる語）が入る。
5) 上記二種類の枠に入らなかった諸構成要素は全部第三枠に入る。この第三枠は文によっては現われない場合もある。

この原則で特徴的なのは，第一に文を具体的な語の配列としてではなく，具体的な語によって満たされる枠の連続として考えることである。そして第二に定形動詞を一般の構成要素と区別し，文の中核となる必須要素とすることである。特殊な文を除いて動詞は必ず現われるが，その他の要素は文型によっては現われない場合もあるから妥当な説であると思う。さらに特徴の第三として挙げられるのは，広い意味でのいわゆる補語を目的補語と副詞とに分けて，それらを主語と同等の1単位をなす要素としていることである。例文(1)〜(3)において主文は各々三枠の図式を守っており，その導入枠に入っている具体的要素，adonc，l'en，

adunc を比べてみると，副詞も主語もともに導入枠を満たすという働きでは同等であることがわかる。

1) Et quant l'en ha descendu celle deus jorné que je vos ai dit, adonc treve une grandisme plaigne et ...

2) Et quant l'en a alés trois jornee, l'en treuve une cité que est appelés Scasem,

3) Et quant l'en a chavauchés VI jornee tel que je vos ai contés, adunc treuve l'en une cité, qui est apellé Sopurgan.

古代フランス語散文では，この原則は非文法的な連続から文法的で平均的な文を区別するのに最も有力であるといえよう。文をこの三枠制の図式によってとらえれば動詞の位置は定まっているので，語順の研究は導入枠と第三枠について論ずることになる。さらに，その枠を実際に満たすのは具体的な要素であり，文はこれら具体的な要素の連続としてのみ現われるのであるから，語順研究は導入枠に入る要素と第三枠に入るその他の要素との関係を調べることになる。

文を導入枠に入っている要素の種類によって文型に分けると，主語．目的補語，属詞，副詞と全ての要素で文は始まっている。

4) Les jens aorent Maomet.

5) Le poil ont peitet et plain, et ce avient por le caut leu.

6) Noble et sajes et porveant estoient san faille.

7) Dever tramontane confines con Jorgiens,

8) Et jadis fu asez plus noble et pluis grant,

しかしながら，文中の要素のどれか1個が導入枠に入り動詞枠に先行するという形式でさえあれば，導入枠と第三枠に入る具体的な要素の配列は全く自由であったというのではない。やはり平均的な傾向がある。例えば古代フランス語のテキストのどのページをとってみても，導入枠に入っている要素は主語が最も多く，副詞がそれに次いでいる。目的補語や属詞で始まっている文は少ない。このように導入枠に入り易い要素とそうでない要素とがある。その上導入枠に入る要素は1個であるから，導入枠に入り易い要素ばかりであっても，それが2個以上同一文中に現われた場合には，1個を除いた残りは全部第三枠に入ることになる。従ってある時代のある方言，あるいはあるテキストの言語において，個々の文例の導入枠と第三枠に入っている要素を比べて，どの要素がどれより優先的に導入枠に入っているかを調べれば，その言語の語順を決定する基準の1つが得られるであろう。

語順を決定する基準としては，上に加えて前後関係もまた重要である。例えば，例文(9)と(10) において導入枠に副詞が入るか主語が入るかは前後関係によるからである。[2)]

9) Et lors se part Lancelot de laienz entre lui et ses compaignons ;

10) Et li preudons se part de laienz et ...

さらに基準の1つとして要素の長さが問題となるが，これについては文体論の領域で論ぜられるべきであろう。古代フランス語の語順を決定するいくつかの基準は以上のようである。

現代フランス語の語順

これに比べると現代フランス語の語順は厳格に規定されているように思われる。先ず動詞の人称語尾が古代フランス語ほど体系的でないので，主語は必ず現われなければならない。

また名詞の格がないので主語と目的補語との区別は位置によってなされる。従って化石的に残っている慣用表現を除けば（主語 ― 動詞 ― 目的補語）という標準的な語順をみだりに変えることはできない。ここでは主語が具体的な形式として現われること及びその位置は古代フランス語の場合ほど問題にならない。また副詞は現代フランス語において1単位としての文の構成要素とみなされず，構成要素あるいはその修飾語を限定する下位部分とみなされている。そしてその位置は一般にはその限定する語句に隣接して現われるのが普通である。このようなわけで一般の副詞は文構造を論ずるときあまり問題とならない。ただし副詞が要素に対してではなく，文全体への限定辞となるときにはやや問題が残る。このような副詞は例文(11)～(16)のように他の要素を切断しないかぎり全ての位置をとることができる。

11) Heureusement l'accident n'eut pas de suites.

12) L'accident n'eut heureusement pas de suites.

13) L'accident n'eut pas de suites, bien heureusement.

14) Pourtant elle se savait aimée.

15) Elle se savait pourtant aimée.

16) Elle se savait aimée pourtant.

副詞が強調されて文末に現われる(13)，(16)のような場合もあるが，一般に(11)，(14)のように文頭に現われるのが普通である。この場合標準的な語順（主語 ― 動詞 ― ）の前にさらに副詞があらわれている。例文(3)，(9)と比べると明らかなように，この(11)，(14)の連続に古代フランス語の三枠制の図式を適用して文構造をとらえることはできない。例文(11)～(16)の副詞 heureusement 及び pourtant は既に語順の定まっている諸要素の間に自由に現われるのであるから，要素を限定する副詞と同様に文の語順の決定に関係ある要素とみなすことはできない。

以上のように現代フランス語の語順と古代フランス語とは別の体系によって考察されなければならない。その両者の違いは大きく2つに要約できる。第一に主語は必ず現われるか，そしてその位置は定まっているかどうかということが問題となる。主語が必ず動詞の前に現われれば，語順を考えるとき主語は動詞と一緒にして扱えるので大きな問題とならない。換言すれば，主語は動詞から独立した要素としての資格を有しているか否かということが第一の問題となる。第二として副詞は単独で被限定辞からはなれて現われることができるか，文の骨組は副詞が現われることによって変わるかどうかということが問題となる。副詞は主語や目的補語と同等の要素としての資格を有しているか否かということである。論じられる点は以上の主語と副詞についての問題になるが，これらは相互に関連し合っていて別々に扱われることはできない。

語順の変遷

文構造の原則の違いは，文を構成する要素が文中で果す役割の違いによる。フランス語の語順の変遷における副詞の役割の変遷は主語のそれと深い係わりがある。そのために副詞の役割の変遷過程を考える前に主語と副詞に関する語順の変遷を概観しなければならない。[3)]

古い時代には導入枠に入る要素として主語と主語以外の要素はあまり区別がなく，文と文との前後関係が最も滑らかに理解できるような既知の要素が導入枠に入った。次いで動詞が現われ，新しく述べようとする内容はその後に続いた。ところが前文から受け継がれてきた内容が主語である場合には，人称は動詞の語尾によって示されるので，既知の主語は要素と

して文中に現われる必要はない。また急に新しい話題が始まろうとするとき，未知の要素を導入枠に入れると前文からのつながりが飛躍する。以上のような場合に導入枠にはsi，orのような副詞が入って何となく前後をつないだ。後になってet siとetとの区別があいまいになったりして，この種の副詞が1単位としての機能を失なってきた。そこでv. Wartburgのいうような過程[4]を経て代名詞主語がこの種の副詞に代って導入枠にこの頃使用されるようになった。代名詞主語のこの用法は動詞の人称語尾が不完全になるにつれて促進された。この代名詞は動詞の語尾によって人称が示されているところへさらに加わるのであるから，例えばjo，jeはラテン語egoと同じ機能を持ってはいない。ただ導入枠を満たすという機能だけを持っている。主語は当然のことながら古くから導入枠に入り易い要素ではあったが，その傾向がはっきりしたのはこの代名詞使用が一般化したのと，一方では名詞の格語尾の喪失によって主語が位置によって表わされるようになったことからである。このことは文型の割合の変遷にも現われている。時代を下るにつれて主語以外の要素が導入枠に入っている文型が少なくなり，（主語 — 動詞 —）が多くなる。v. Wartburgによれば la Chanson de Rolandではrégime-verbe-sujetは42%に及ぶが，Joinvilleになるとその割合は11%に下がっているという。[5] こうして主語が動詞の前に現われることが多くなると，場合によっては副詞と並置されて動詞の前に現われることもあり得る。同じくv. Wartburgによれば XII 世紀ならば例文(17)のようになるべきところをJoinvilleでは(18)のようになっている。[6]

17) *maintenant s'agenoillent li six message.

18) maintenant li six message s'agenoillent.

この(18)は先に挙げた例文(11)，(14)と同様の構造であり，既に現代フランス語と同じ語順をなしている。主語と副詞の役割の変化によって文構造の図式の概念が崩壊していく過程が，古代フランス語の文法体系が崩れて現代フランス語の文法体系へ移っていく過程である。同一方言の時代別のテキストを選んで調べれば，その変遷の様子は詳しく跡づけられるはずである。

ここではテキストとして「マルコ・ポーロ旅行記」[7]を選び，それの第1節より第63節の間から得られた文例を分類して，その数から推察できる範囲で，副詞が文の構成要素としての資格を失なう過程と，それによって起る文型の割合の変化 — 即ち（主語 — 動詞 —）の増加 — について考えてみたい。

導入枠にのみ入る副詞

文の副詞的要素は導入枠にのみ入る副詞と導入枠にも第三枠にも入る一般の副詞とに分けた方が考え易い。導入枠にのみ入る副詞．略して導入副詞はsi，or，puis，adonc等で，決して第三枠には入らない。これらはまた文中の位置によってだけではなく意味上からも特徴があって，文意を構成するに際して前後を滑らかにつなぐという消極的な役割しか持たない。adoncはやや具体的な意味があるが，このテキストではこの語が第三枠に入っている例はないので導入副詞とする。これと似た副詞でもencoreやorendroitは(19)～(24)に見られるように両方の枠に入っているので．導入副詞の中には入れなかった。

19) Et encore hi a cristiens et...

20) et des leon hi a encore...

21) mes orendroit sunt il cheitif et...

22) plusors jenerasion de jens les quelz vos deviserai orendroit,

23) Et jadis fu asez plus noble et pluis grant,

24) Cascar fu jadis roiames,

導入副詞の現われている主な文型とその数は表(1)のようである。

25) Puis li baillent le saint oleo, (副詞 — 動詞 —)

26) Puis hi ala le tierce, (副詞 — 動詞 — 主語)

27) Adonc Argon prist trois sez barons ... (副詞 — 主語 — 動詞 —)

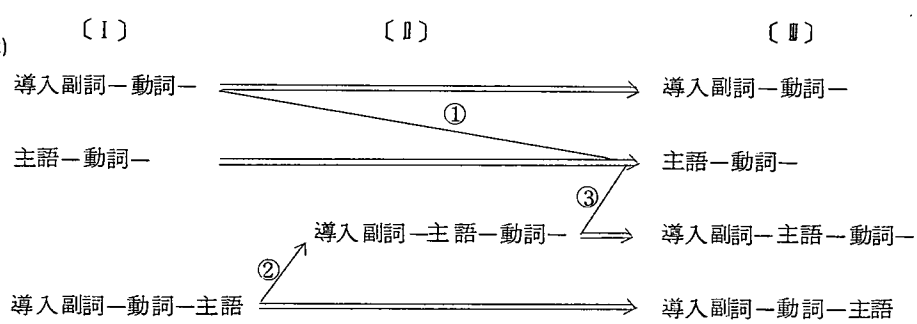
表(1)

導入副詞—動詞	133	導入副詞が単独で導入枠に入っているもの
導入副詞—動詞—主語	14	
導入副詞—主語—動詞—	17	
主語—導入副詞—動詞—	2	
導入副詞—目的補語—動詞—	1	
合　　計	167	

この表によると文型によってその数にかなりの片寄りが見られる。このことから副詞と語順との関係の変遷を跡づける手掛りが得られると思う。ここでは導入副詞と主語が問題となるので，それ以外の要素については言及しない。そしてまた(主語 — 導入副詞 — 動詞 —)と(導入副詞 — 目的補語 — 動詞 —)という文型は例の数が少ないので．例外として扱いたい。

表(1)には現われていないが(主語 — 動詞 —)という文は 1457 例ある。この事実と表(1)の数字から，このテキストに至るまでの語順の歴史的推移 — 導入枠に入るのは時を経るに従って主語が多くなったその過程 — を図(2)のように仮定することができる。

図(2)



この図の〔Ⅰ〕,〔Ⅱ〕,〔Ⅲ〕は変化の段階を示すものであって，時間的な並行を意味するとは限らない。⇒ は変化のなかったことを示し，→ は何らかの変化のあったことを示す。これは以下の図においても同様である。さて図(2)において①の変化は，(導入副詞—動詞—)であった文の導入枠へ〔Ⅰ〕の段階で現われていなかった代名詞主語が入ったことを示している。文の形式を整えるために導入枠に入っていた導入副詞は主語と置き代わった。今までに挙げた例文では，例文(1)の構造が(2)の構造へかわった変化である。しかしこの変化は導入枠内の要素として主語の方が導入副詞より優先的になっただけであり，文構造の図式は三枠制を守っていて変化があったわけではない。これに対して②の変化は，例文(17)が(18)の構造に

なる変化であるが，導入副詞が主語と代わったのではなく，第三枠の主語が前に出た変化であるから，例文(18),(27)のように導入副詞と主語とが動詞の前に並置されるようになった。これは上の①の変化とは異なり，語順の原則そのものが変化させられている。まず導入副詞がまだ文の要素と認められているならば，この文構造によって導入枠という概念や三枠制の図式が崩壊したことになる。逆に導入枠という概念が保たれていたならば，導入副詞か主語のどちらかが語順に関係する構成要素としての資格を失なったことになる。①の変化はこの並置される段階を経たかどうか明らかでない。というのはこの変化は導入枠に入る要素として導入副詞か主語かの一方を選ぶとき，代名詞主語を選ぶ方が次第に多くなったという変化であるからである。②の変化によって生じた連続のうち一部はそのまま〔Ⅲ〕の段階まで残っている例もあるが，これは上記のように不安定であるから安定した文型に変化した。これが③の変化である。文意にあまり関係のない導入副詞は現われなくなり（主語—動詞—）という文型がその結果として増加した。①，③の変化によって，〔Ⅰ〕の段階で既に多かった（主語—動詞—）の文型はさらに増加した。

以上のような過程を経て導入副詞で始まっている文の割合は減少した。このテキストの言語はこの〔Ⅲ〕の段階，（主語—動詞—）という文が急激に増加して文全体の過半数をしめるようになった段階にあたる。従って語順の自由はいくらか残っているものの，導入枠へは主語が最優先されるという習慣の確立した頃の言語であると考えられる。

こうした傾向にもかかわらず，〔Ⅲ〕の段階になっても（導入副詞—動詞—主語），（導入副詞—主語—動詞—）のままで残っている例がある。三枠の図式からはずれている（導入副詞—主語—動詞—）は，導入副詞が文から独立した接続詞のようになって残ったのか，あるいは導入副詞と主語との間に発音上の切れ目を設け（導入副詞），（主語—動詞—）として残ったのであろう。こうなれば副詞はもう語順に関係した要素ではなくなっている。これらの例外的に残っている例を検討することによって，図(2)の変化過程をより詳しく観察できると思う。具体的な導入副詞とその現われている文型の数は表(2)のようである。

表(2)

	導入副詞—動詞—主語	導入副詞—主語—動詞—	導入副詞—動詞—
adonc	4	11	28
adunc	1	1	
adont	1		1
atant	1		
donc	1		
dont		3	
ensi	2		1
or		1	50
puis	3	1	18
si	1		35
合　計	14	17	133

この表から，これらの導入副詞を4種のグループに分けることができる。

1) adonc　（全ての文型に多い）

2) puis　（導入副詞—動詞—に多いが導入副詞—動詞—主語にもある）

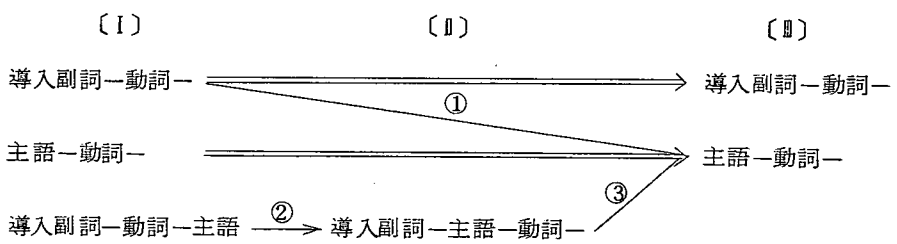
3) or, si　（導入副詞—動詞—に多い）

4) その他　（例が少ないので特別には扱わない）

これらのグループを比較してみると，or, si よりも puis が，puis よりも adonc 類がその初期の文構造を保存している。換言すれば主語最優先の影響を or, si が最も多く，adonc 類が最も少なく受けている。adonc 類は〔Ⅲ〕の段階まで（導入副詞—動詞—主語）という文型を残しているので，adonc 類の一部は主語を第三枠に排して自からが導入枠に優先的に入るという資格を保っていると考えられる。このように主語より優先的に導入枠に入り得るのは，adonc が encore や orendroit 等と同様にやや具体的な意味を持ち，文意の構成に積極的に参加しているためであり，si や or ほど簡単に主語と置き代えられては文意が不充分になるからだと思われる。

以上から全ての副詞が同時に文構造に変化を与えたのではなく，各々が多少ずれた推移をしていると考えることができよう。まず一番分布の片寄っている or と si は，はじめから（導入副詞—動詞—主語）の文型には現われなかったので，当然②，③の変化は起らなかったと考えることもできるが，例外的に現われている例から，やはり〔Ⅰ〕の段階でいずれの文型にも現われていたと考える方が適当であろう。ところがこれらは〔Ⅰ〕,〔Ⅱ〕の段階の文型を〔Ⅲ〕の段階まで残すこともあまりなく．その多くは図(3)の変化を経て（主語—動詞—）の文型になっている。

図(3)



①の変化を受けないで残っている例は例文(28)～(32)に見られるように慣用的なきまり文句が多い。

28) Or vos diron de ...

29) Or vos ai contés de ...

30) Or vos avun dit de ...

31) Et si vos di que ...

32) et si les vos contrai por lor nom tuit.

また従属文を受けて現われている(33),(34)の例もきまり文句に準ずる用法といえよう。

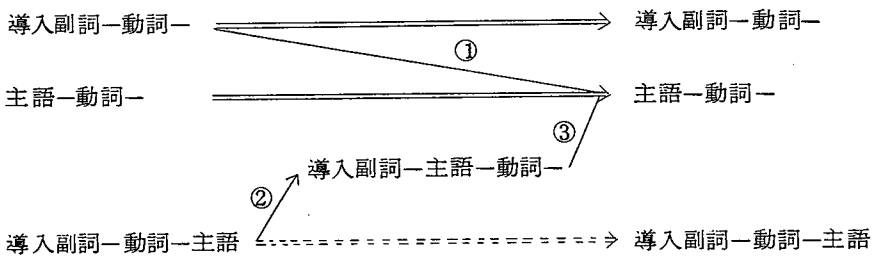
33) Et quant le legat ot entendu ce que les deus frers li avoient dit,si n'a grant mervoie et...

34) Et quant les trois barons furent venu au grant kan, si li distrent lo porcoi il estoient venu.

ところが puis については，わずか3例ではあるが（導入副詞—動詞—主語）が複数現われているので，図(4) — 次ページ参照 — のような変化過程を仮定することができる。

最後に adonc については，〔Ⅰ〕の段階に仮定される（導入副詞—動詞—主語）の大部分が

図(4)



②，③の変化を受けて（主語—動詞—）へと変化したが，その一部は初期の文型のまま残っている。従って図(2)のような全ての過程を考えることが可能である。

ただし，導入枠に入るための主語との優劣関係と，文の構成要素としての独立性とは別のことであることを忘れてはならない。or，si は adonc より容易に主語によって置き代わられたが，1単位の要素としての資格が失なわれたわけではない。というのは三枠の図式からはずれた（導入副詞—主語—動詞—）という文型としては現われないからである。一方adonc の方は主語よりも優先的に導入枠に入っている例もあるが，動詞の前に主語と並置されたりして図式からはずれ，要素としての独立性は失なわれている場合もある。従って or，si の方が語順に関係のある要素としては独立性が強かった。

以上から導入副詞が要素としての資格を失なっていく過程と，導入枠の中に主語が入る過程を要約すれば次のようになる。

導入副詞に代わって主語が動詞の前に現われ易いという現象の影響は，まず or，si に，次いで puis に及んだが，adonc 類にはやや遅れた。「マルコ・ポーロ旅行記」の言語では未だ主語を第三枠に残している例もある。しかし，その傾向は既に adonc にも及んでいるために，大部分は or,si と同様の過程を経て（主語—動詞—）の文型となっている。導入枠に入るための導入副詞と主語との優劣関係はこのように変遷したが，これと平行して．具体的な語によって多少前後しながらも，導入副詞は1単位の要素としての独立性を失なっていった。その過程は adonc に次いで or，si，puis 等に及んだと思われる。encore，orendroit，jamés 等は表(2)の adonc と同様の分布を示すが，それとは異なり第三枠にも入っているので時の副詞として次節で扱う。以上のように導入副詞の現われている文に主語が新しく加わったと考えられるほかに，表(2)の分布からは dont が示しているように，以前（主語—動詞—）であった文に新しく副詞 dont が加えられて（副詞—主詞—動詞—）となったと考えても自然な例もあるが，それについては別の機会に考えたい。

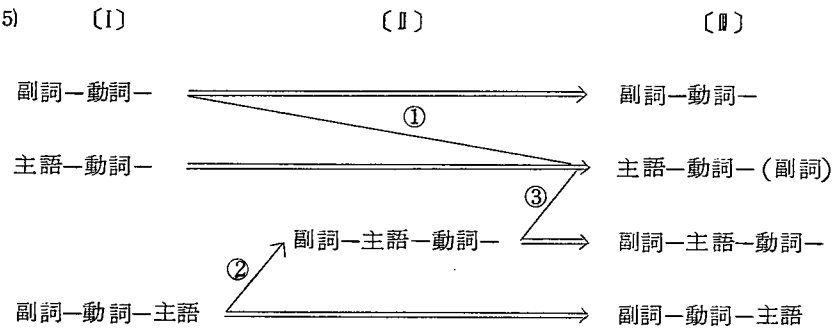
一般の副詞

次に導入枠にも第三枠にも入っている一般の副詞と主語との関係を考えてみたい。これは大体導入副詞の場合に準じている。副詞が動詞の前に現われているのは，単独に導入枠に入っている副詞を含めて，表(3)のように335例である。この表からやはり図(5)のような変化過程が仮定できる。

表(3)

副詞—動詞—	206	} 副詞が単独で導入枠に入っているもの
副詞—動詞—主語	83	
副詞—主語—動詞—	46	
合　　計	335	

図(5)



図(5)は図(2)と同じであるが，一般の副詞の場合は導入副詞の場合と異なっていて，①及び③の変化によって主語が導入枠を占めても，副詞が現われなくなるということはない。というのは一般の副詞は具体的な意味を持っているので，それが現われないと始めの文意が不足してしまうからである。従って図(5)のように第三枠に入ることになる。

一般の副詞といっても，その種類や形式は実に多様である。この多様な副詞を下に見られるように，時を示す副詞，場所を示す副詞，その他量．程度．方法などを示す副詞の3種に分けると表(4)のように特徴のある分布が得られる。

1) 時の副詞；

ansienement, aprés, desormé, encore, jadis, orendroit, en un anz, et jor et noit, l'inver, le jor meisme, plosors fois, trois jornee plus avant, etc.

2) 場所の副詞；

iluec, la, pres, qui(ici), devant le ydre, en tute celle provence, entre Baudac et Chisi, eu mileu de le yglise, sour la rive, etc.

3) その他の副詞；

bien, certe, maus, molt, tant, voiramant, con les sajes, contre lor foi, en telle mainere, in grant abundance, san faille, tout ausi, etc.

表(4)

	時の副詞	場所の副詞	その他の副詞
副詞—動詞—	85	66	55
副詞—動詞—主語	29	31	23
副詞—主語—動詞—	22	3	21
合　　計	136	100	99

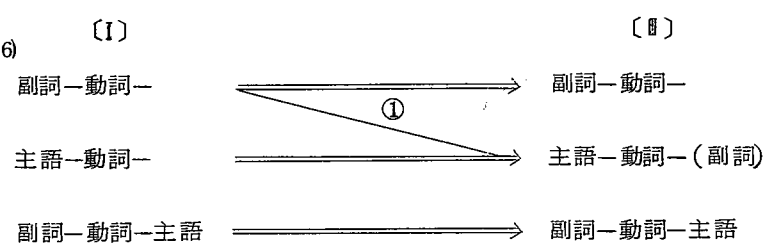
表(4)の分布の様子は導入副詞の場合に似ている。時の副詞及びその他の副詞は（副詞—動詞—）が多い。それと比べれば少ないが，（副詞—動詞—主語）にも（副詞—主語—動詞—）

にも相当数の例がみられる。従って図(5)の①，②，③の全ての変化が仮定せられ，残っている多様な例は〔I〕,〔II〕の段階で変化しなかった例であると考えられる。

ところが場所の副詞では（副詞—主語—動詞—）の文型がわずかに3例である。全体の例が少ないので，これが偶然なのか有意味な差なのか明らかではないが，ここでは有意味であると考えたい。そうしてみると，三枠制の図式を守っている（副詞—動詞—），（副詞—動詞—主語）には他の副詞と同じ位現われて，図式からはみ出している（副詞—主語—動詞—）の文型のみ少ないという興味深いことになる。その結果，場所の副詞は他の副詞より要素としての独立性が強いので，図式からはみ出た文型として現われることは少ないという結論に導かれる。これは導入副詞と同様に一般の副詞も要素としての独立性に差があるということである。場所の副詞だけ別に考えた方がよいと思われる。

別に考えるとなると，主語との関係において2通りの変化過程る仮定できる。まず第一は場所の副詞は主語優先の影響を受けていないという仮定である。一般に主語は動詞の前に現われるようになったので，主語の現われていなかった文は図(5)の①の変化を受けて，（主語—動詞—副詞）となった。主語が既に第三枠に現われている文は，次の段階として（副詞—主語—動詞—）となるはずである。ところがこの副詞は独立性が強いので，三枠の図式からはみ出る文型を生じさせる②の変化はこのテキストの時代まで起らなかったと考えるわけである。この仮定によれば，主語が第三枠に，場所の副詞が導入枠に入っている場合，②，③の変化を受けるのは他の副詞より遅かったということになる。以上の仮定の〔III〕の段階までの過程を図示すれば図(6)のようになる。

図(6)

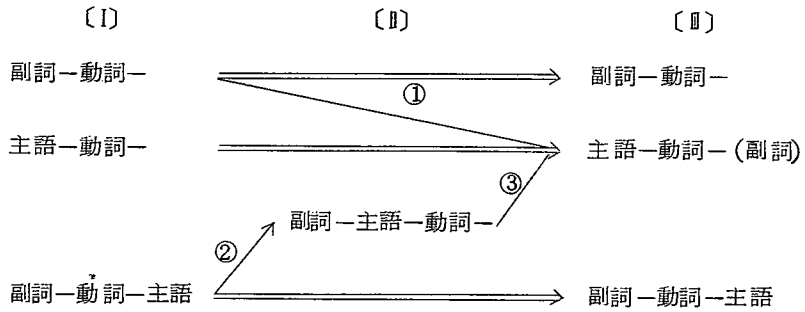


この図によると，（副詞—動詞—主語）という文型の数は〔I〕の段階以来あまり変動がないはずであるが，このテキストでは66例しかない。この66例という数は②，③の変化によってその数が減ったと思われる時の副詞の85例より少ない。〔I〕の段階で場所の副詞は時の副詞と同程度に導入枠に現われていたと考えられるから，全部が残っているにしては，この66例はあまりにも少なすぎる。やはり②，③の変化を受けていると考えられる数である。そうなると当然場所の副詞が他の副詞より主語優先の影響を受けていないという仮定は認められなくなる。

②の変化がなかったらもっと多く残っているはずの文型が少ないこと，及び②，③の変化の結果を含んでいると思われる（主語—動詞—場所の副詞）の文型が他の副詞と同じように多いこと，この2点を解決するために第二の仮定をすることができる。場所の副詞は導入枠への優先順位では主語より下位になったので，②の変化を受けたという仮定である。ただし，この副詞は文構成の要素としての独立性が強いため，図式からはみ出した文型のまま〔III〕の段階まで残ることはなかった。従って早い時期にほとんど全部が③の変化を受け，このテキ

ストの時期では既に（主語—動詞—副詞）という文型になってしまっていると考えられる。この仮定によれば，主語が動詞の前に優先的に現われるという影響を他の副詞より早く徹底して受けているということになる。従って図(7)の過程が考えられる。

図(7)



この場所の副詞について，図(6)より図(7)のように考えた方が適当であると思う。古代フランス語の文法体系から現代フランス語の体系へと語順の原則が移りかわるとき，以上のようにその変化過程は場所の副詞と他の副詞ではずれがある。導入枠への主語優先の影響を他の副詞より早く受けたけれども，要素としての独立性を失なったのはおそらく他の副詞より遅かったのではないだろうか。ただし，この副詞は変化が早く進み，整理されたので，外見上独立性があるかのように見えるのかもしれない。他の副詞も次の段階になり（副詞—主語—動詞—）が整理されれば，独立性のあるような分布を示すようになることもあり得る。時の副詞は現代でもなお主語と並置される場合があるので，この変化は未だ終っていないのかもしれない。

以上によって古代フランス語の語順の原則が崩れる過程を次のように要約することができる。

古代フランス語の副詞の中で，語順を決定する文の構成要素という概念が崩れていったのは，adonc のような時の副詞に近い導入副詞から始まった。この現象は adonc と同時かまたはそれに次いで一般の副詞にも起ったが，導入副詞 or，si や場所の副詞はやや遅れたと考えられる。後になってほとんどの副詞が要素でなくなると，文は副詞に関係なく，主語，動詞，目的補語の配列によって構成されるようになる。これが現代フランス語の語順である。ただし，文構造の枠組ではなく，具体的な語順は，一般に主語が動詞の前に現われるようになったため，次第に固定し自由でなくなる。副詞がこの影響を受けて文型に変化を与えた過程は図(2)〜(7)に示したように，個々の語またはグループによってずれがあって一様ではない。それは要素としての独立性とは反対に or，si や場所の副詞の方が早く完了し，他の副詞はやや遅れている。

このような経過で副詞に代わって主語が現われるようになり，様々な文型が（主語—動詞—）に変化したから，現代フランス語ではこの文型が多いのである。

付記：本稿は，その一部を「パリ国立図書館所蔵 fr．1116 よりみた語順」と題して日本ロマンス語学会 1969 年度秋期大会で口頭発表したものに加筆訂正したものである。

(注)

1) Rudolf Thurneysen : "Zur Stellung des Verbums im Altfranzösischen", Zeitschrift für romanische Philologie, XVI (1892). pp. 289 — 307.
次の論文においても原則は同じである。
Walther von Wartburg : "Les pronoms sujets en français", Revista de filología española, XXV (1941). pp.465-477.
József Herman : "Recherches sur l'ordre des mots dans les plus anciens textes français en prose", Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae, Ⅳ (1954). pp. 69-94 & 351-382.
Glanville Price : "Aspects de l'ordre des mots dans les ≪Chroniques≫ de Froissart", Zeitschrift für romanische Philologie, LXXVII (1961). pp.15-48.

2) P. Rickard : "The Word-Order Object-Verb-Subject in Medieval French", Transactions of the philological society, (1962). pp.1-39. では Subject より優先的に導入枠に入っている Object を前後関係で正当化している。

3) 代名詞の役割については拙稿 "An Essay on the Subject Pronoun in Mediaeval French — Function and its change — 「名城大学人文紀要」第10集(1970)所収によってふれた。

4) W. v. Wartburg : Problème et méthodes de la linguistique, traduit par P. Maillard & S. Ullmann, 2e éd.. p.79.

5) W. v. Wartburg : Évolution et structure de la langue française, 8e éd.. pp. 129-130.

6) ibid. p.130.

7) パリ国立図書館所蔵 fr.1116 を基としての Luigi Foscolo Benedetto : Marco Polo, Il Milione. Firenze 1928. の Il testo : Le Divisament dou Monde. による。
ただし各節の題の文は本文と等質でない部分もあるので除いた。

(名城大学　講師)